

# 「ふれあい広場」における高齢者と 子どもの交流活動に関する一考察

— H県K市の事例における「高齢者の生きがい感」に着目して —

楊 丹

A Study on Exchange Activities between the Elderly and Children at “Fureai Hiroba”  
— Focusing on “the meaning of life” for the elderly in the case of K city in H prefecture —

Dan YANG

**Abstract:** This paper presents a study of “Fureai Hiroba” in K City, H Prefecture, examining how a “meaning of life” is generated for the elderly, and showing how raising grandchildren can enhance “the feeling of life” for the elderly. The purpose was also to generate suggestions for such activities. By analyzing an interview with the operator of “Fureai Hiroba,” the following content was clarified. First, as stated by Kondo et al. (2003), the elderly have ambitious feelings, supported by the awareness of being useful to their families and other people, and a sense of self-affirmation based on their own achievements and improvements. Second, it was found that the growth and development of children was seen as a characteristic of “Fureai Hiroba.” Third, raising grandchildren gives the elderly “a sense of purpose” as it involves the interaction of children with their grandparents in various ways. It was suggested that the activity should include an opportunity to teach social rules, and a place where children can feel at ease. Fourth, for the elderly to experience “a sense of purpose,” it is necessary to ensure that interaction with their grandchildren is not a one-off event, but an ongoing involvement.

**Key words:** elderly people, grandchild raising event activities, feelings of purpose for the elderly  
キーワード：高齢者、孫育てイベント活動、高齢者の生きがい感

## 1. 問題の所在と研究の目的

日本において、急速に少子高齢化を迎え、世代間交流活動が注目されている。「令和3年版高齢社会白書」(内閣府, 2021)によると、2020年において高齢者(65歳以上人口)は3619万人であり、高齢化率は28.8%となった。2065年の予測値を見ると、高齢者の割合は38.4%に達し、約2.6人に1人が65歳以上の者となる社会が到来すると推計されている。単身高齢者世帯や高齢者夫婦世帯も増加している。老人福祉法(1963)第2条では、高齢者が生きがい感をもてる健全な生活を保障する必要性が述べられている。高齢社会対策基本法(1995)総則第5条では、国民は自らの高齢期に、健やかで充実した生活を営むことができるように、高齢者自らが努力する必要性が指摘されている。同法律第11条では国民が生きがいをもって豊かな生活を営むことができるように、国が生涯学習の機会を確保する施策の必要性が指摘されている。実際に、「生活支援

サービス立ち上げマニュアル4ふれあい・いきいきサロン」(全国社会福祉協議会, 2010)によって、高齢者がいきいきと暮らすための地域の活動の場として「ふれあい・いきいきサロン」事業が全国的に推進されている。「平成17年版高齢社会白書」(内閣府, 2005)によれば、近年、「高齢者の社会参加と生きがいづくり」という高齢者の社会参加活動が促進されている。また、「長寿社会における生涯学習の在り方について」(文部科学省, 2012)では、新しい高齢者観や価値観をつくり出していくことが求められ、「人生で培ってきた知識・経験をもとに、積極的にボランティア活動などの社会貢献活動や地域活動に参画し、学びと実践を繰り返しつつ、自己実現、生きがいの創出を図っていくことが必要である。」(11頁)、「さらに、地域の伝統文化や昔からの遊びの伝承のほか、高齢者が有する子育て、家事、地域活動に関する経験や知識について子どもたちや若者に伝える機会を増やし、地域における世代間交流を促進していくことも必要であ

る。」(12頁)と指摘されている。以上のように、高齢者の生きがいの一つとして、高齢者と子どもがふれあう機会を作ることが注目されるようになっていく。

これまでの高齢者と子どもの交流活動に関する研究を整理すると以下ようになる。第1に、子どもへの効果に関する研究があげられる。上村ら(2007)は広島県呉市の保育所と老人介護施設を取り上げ、世代間交流が幼児に及ぼす影響を検討し、「幼児にとって高齢者と関わることは、非常に肯定的に受け止められており、高齢者との日常的な交流は、他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与している」(68頁)ことを指摘した。内田ら(2013)は高齢者による自然体験活動支援が児童養護施設入所児童の高齢者のイメージに及ぼす影響を検討し、子どもは高齢者に対して「『やさしい』や『頼りがい』といった感情を高めていった」(15頁)ことを指摘した。村山ら(2021)は川崎市A小学校の小学生85人を対象として、小学校における高齢者の読み聞かせボランティア活動を取り上げて、子どもの共感的関心の向上に及ぼす影響について明らかにした。その結果、高齢者との交流を通して、子どもは高齢者に対する親密感が向上しており、それによって共感的関心の向上に寄与することが指摘された。

第2に、高齢者側の効果についての研究である。亀井ら(2010)は都市部在住高齢者と小中学生を対象とした多世代交流型プログラム(IDP)を創設し、その参加者である高齢者を12か月間にわたり参加観察することにより、「世代間の連帯により高齢者の孤立を防ぎ、意味ある居場所となり、高齢者の心の健康に良い効果をもたらす」(23頁)ことを指摘した。相良ら(2021)は首都圏で世代間交流型ボランティアを行う9団体の高齢者を対象として、絵本の読み聞かせの活動頻度と心身・社会的状況との関連について検討し、「頻繁に読み聞かせ活動を行っている高齢者は、利他的動機が醸成されるとともに、活動を通じて、自己有用感を高めることにも繋がっている」(30頁)ことを指摘した。

北村(2004)は、子ども・若者など次世代に対するケア、教育の担い手として、シニア・シルバー世代の生きがい感を促進するという視点が重要であると指摘した。高橋ら(2015)は、東京都「板橋区福祉の森サロン」に登録した28ヶ所の多世代を交えた子育てサロンの運営者及び参加者の調査を通して、多世代が参加する子育てサロンの実態について明らかにした。その結果、高齢者はサロンでの定期的な活動に参加することを通して、社会的孤立を解消できること、親世代との交流を通じた生きがい感を獲得できることを指摘し

た。森田ら(2017)は、全国の学童保育における高齢者と子どもの世代間交流を実践することにより、高齢者の生きがい感、地域貢献や地域とのつながりを実感しやすくなることを示した。このように、近年、高齢者の生きがい感につながる子どもとのふれあい活動に着目した研究が増えている。本論では、子どもと高齢者とのふれあいが、高齢者の生きがい感につながることに着目することにする。本論では、近藤ら(2003)、楊(2021)に従い、「高齢者の生きがい感」を「家族や人の役に立っているという自覚や、自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情」と定義する。

楊(2021)は高齢者と子どもの交流活動を3つに分類している。本論は、そのうち、年に数回程度開催されるイベントで自分の孫以外の孫世代の子どもと関わる「孫育てイベント活動」を取り上げる。

本論では、H県K市「ふれあい広場」への参加における子どもと高齢者の交流活動の実際を把握し、それを通して、「高齢者の生きがい感」という視点から見て必要な「孫育てイベント活動」への示唆を得ることとする。

## 2. 研究方法

### (1) 事例検討—H県K市「ふれあい広場」

本論では、H県K市の「ふれあい広場」(以下、「ふれあい広場」)を事例として取り上げ検討することとする。

#### ①「ふれあい広場」が開設された背景

「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について」(内閣府, 2004)による高齢者活用子育て支援事業が全国的に推進されている。また、地域の高齢者が子育て経験を生かして親世代を支援するという、地域子育て支援拠点事業の活動が各地で行われている(内閣府, 2010)。H県においては、H県版第8期高齢者プラン<sup>1</sup>において、「高齢者の健康寿命の更なる延伸や、地域共生社会の実現に向けた地域包括ケアシステムの充実を図り」、高齢者が積極的に社会活動に参加できる環境づくりといった高齢者支援施策が積極的に進められている。そのプランには、「人生100年時代健やかに生きがいを持って暮らす」という項目があげられている。具体的な取り組みとして、第1に健康づくり、介護予防、第2に高齢者の「欲張りなライフスタイル」を応援する環境づくり、第3に高齢者にやさしい環境づくりという3点があげられる。本論ではこのうち、第2の高齢者の「欲張りなライフスタイル」を応援する環境づくりに含まれる、高

「ふれあい広場」における高齢者と子どもの交流活動に関する一考察  
 ― 兵庫県K市の事例における「高齢者の生きがい感」に着目して ―

高齢者の生きがい活動の促進に着目する。

H県K市では、高齢者の生きがい活動を促進する政策の一環として、K市高齢者福祉計画<sup>2</sup>において、『「生きがいを持ち、輝いた生活の実現」』として、高齢者が地域において自立した生活が営めるよう、豊かな知識と経験を生かして社会参画できる体制を整備し、生きがいを持って地域社会とのつながりのある暮らしができるまちづくりを推進している。K市は少子高齢化や人口減少が進み、商店街の空き店舗化が進んでいる。まちづくりを担う人たちの高齢化や固定化、後継者不足の課題もある。特に、若い世代がまちづくり活動に関わっていない問題がある。K市のまちづくり計画<sup>3</sup>の振興方針は「子どもも大人も高齢者も世代に関わりなく交流の輪を広げ、そんな中で子どもが育っていく愛があふれる『交流の町』を目指します」である。本論で取り上げる「ふれあい広場」はこうした課題に応えるための施策の一環として開設されたものである。K市は、「ふれあい広場」への支援を行うことで、地域の誰でもが集える居場所を作ろうとした。「ふれあい広場」は、地域のまちづくりの一環として、高齢者たち、親たち、子どもたちの交流を促進することが期待されている。

②「ふれあい広場」の概要

「ふれあい広場」は、2012年9月に開設され、10年の歴史がある。大藤(2016)によれば、「ふれあい広場」は、「子どもから大人、高齢者まで、みんながふれあう」場所である。高齢者たち、親たち、子どもたちなど、地域の誰でも行ける居場所になっている。大藤(2016)に従って、運営者、場所、資金、プログラム、利用者5つの側面から説明する。

第1に、運営者についてだが、運営しているのは「ふれあい広場」担当者のB氏1名ともう1名の高齢者である。運営を支えているのは、高齢者ボランティアス

タッフの16名である。1日3名ずつ高齢者ボランティアスタッフが「ふれあい広場」に常駐して、運営を支援している。第2に、場所についてだが、K市の商店街内にある約11坪の空き店舗を借り受けている。隣にR小学校がある。街中にあるので、集まりやすいという利点がある。第3に、資金についてだが、当地区ではまちづくり委員会を組織しており、このまちづくり委員会からの助成がある。それに加えて、「ふれあい広場」に来た方々に提供しているかき氷やコーヒーの代金からの利益がある。第4に、プログラムについてだが、平日はお茶会、囲碁・将棋の腕試しなどを行っている。また、定期的に「うた声広場」、「らくらく体操教室」、「手芸教室」も開催されている。2月の節分、3月の震災コンサート、4月のお花見会、6月の七夕飾りづくり、7月の夏祭り、12月のクリスマス会のように、様々なイベントも行われている。第5に、利用者についてだが、平日は平均25人で、月平均500人くらいが利用している。なお、コロナ禍のため、2020年と2021年は、ほとんどのイベントが休止になっている。

(2)「ふれあい広場」の様子

①日々の活動の様子

「ふれあい広場」の日々について、大藤(2016)を参考にし、B氏にも確認を取りながら、常設の広場と教室(講座)2つの側面から説明する(表I参照)。第1に、常設の広場として、月曜日から土曜日の10:00~16:30まで開設している。前述したように、参加者は一日平均25人、月平均500人である。平日は高齢者の参加者が多く、囲碁・将棋をしたり、お茶やコーヒーを飲んだり、雑談したりしている。子どもは一日約5人で、放課後や土曜日に来る場合が多い。子どもはかき氷を食べたり、宿題、勉強会、新聞づくり、ゲームなどをしたりしている。第2に、定期的に教室(講

表I 日々の活動の内容

日々の活動	日時	参加者数	活動内容
常設の広場	10:00~16:30 (月~土)	毎日約25人、その中、 子どもは毎日約5人	高齢者は、囲碁・将棋、お茶やコーヒーを飲む、雑談、子どもは、かき氷を食べる
教室(講座)	座って出来る体操教室(毎月)、 約1時間	高齢者約15人	高齢者施設の方が来て、頭や体の動く練習、口を上げる練習、声を出す練習、お茶会、雑談など
	簡単手芸教室(隔月)、約2時間	高齢者約10人	アクセサリづくり、動物形の飾りづくり
	みんなで歌おう歌声広場(隔月)、 約1時間	高齢者約30人	懐かしい歌、よく知っている歌を歌う

注:大藤(2016)を参考にし、B氏にも確認しながら作成した。

座)を行っている。1つ目は、「座って出来る体操教室」である。「座って出来る体操教室」は毎月開催され、高齢者約15人が参加している。約1時間程度で、高齢者施設の方が来て、参加者と一緒に頭や体の動く練習、口を上げる練習、声を出す練習、お茶会、雑談などを行っている。2つ目は、「簡単手芸教室」である。「簡単手芸教室」は隔月開催され、1回につき2時間程度で、高齢者約10人が参加している。参加者はアクセサリや動物の形の飾りを作っている。3つ目は、「みんなで歌おう歌声広場」である。「みんなで歌おう歌声広場」は隔月開催され2時間程度で、高齢者約30人が参加している。歌の内容は懐かしい歌、よく知っている歌である。

「ふれあい広場」の壁には、「ふれあい広場」での活動の写真、子どもからのメッセージ、子どもが描いた絵が貼ってある3つのコーナーがある。写真コーナーには、7月の夏まつりの写真がたくさん貼ってある。浴衣を着ている子どもたちがダンスをしている姿、ゲームをしている子どもの姿の写真がある。メッセージコーナーは、2つのコーナーに分けられる。1つ目は、「恩返しコーナー」である。このコーナーには、以前「ふれあい広場」によく来ていた子どもが書いた感謝の言葉が書かれている。「ふれあい広場」に来て

いて、以前は小学生で、現在は中学生になった子どもが、自発的に「恩返し隊」を作り、「ふれあい広場へ」の恩返しをしたいということで、「ふれあい広場」の場所を使って、「R中(学校)カフェ」という活動を2回行った。高齢者ボランティアスタッフとの立場を交換して、中学生がボランティアになって、高齢者ボランティアスタッフはお客様という形で行われた。2つ目は「『ふれあい広場』でお話を聞いてコーナー」である。このコーナーの子どもは、R小学校の子どもである。メッセージの内容は、R小学校の子どもが、授業で「ふれあい広場」のB氏の話聞いて、「ふれあい広場」を見学した後の感想である。子どもが描いた絵コーナーには、子どもが夏祭りのお絵描きコーナーで描いた絵を貼ってある。絵の内容は主に夏祭りの様子である。また、R小学校の卒業生が描いたR小学校の風景の絵も貼ってある。

## ②イベントの様子

2019年9月から2019年12月まで開催された全6回のイベントのうち、実際に観察を行った2回分、イベント5とイベント6を取り上げる。活動の内容は表Ⅱの通りである。

論者は、「ふれあい広場」に参加する許可を得て、2回の「ふれあい広場」のイベントに参加し、イベン

表Ⅱ イベント活動日程と活動内容

イベント名	日時	高齢者ボランティアスタッフ人数	参加者	イベント内容
イベント1・節分	2019年2月3日(日) 15:00~16:30	18人	高齢者20人、子ども20人	ぜんざいを食べる、豆まきをする
イベント2・震災コンサート	2019年3月3日(日) 14:00~15:00	10人	高齢者30人~40人	様々な楽器で演奏しながら、歌を歌う、思い出の詩を朗読する
イベント3・お花見会	2019年4月1日(月) 11:30~13:00	18人	高齢者50人~60人	R小学校の庭の桜の木の下で、お酒を飲む、弁当を食べる、雑談をする
イベント4・七夕飾りづくり	2019年7月1日(月)~7月7日(日) 1週間	18人	地域の20人、R小学校1年生~6年生の学生	地域の人と高齢者スタッフボランティアは、R小学校の小学生と高齢者が作った短冊を町に飾る
イベント5・夏祭り	2019年7月27日(土) 17:30~20:30	18人	地域住民約300人(その中、小学生、小学生以下の子ども約100人)、地域のボランティア30人	オープニング音楽、小学生のダンス、安来節、盆踊り、音楽演奏、食品売り場(おにぎり、揚げ物、かき氷、綿菓子、飲み物などの販売)、お絵かきコーナー、スーパーボールすくい、風船つり、くじ引きコーナー、子ども花火大会、輪投げ、手芸販売
イベント6・クリスマス会	2019年12月21日(土) 10:00~13:00	18人	地域住民約70人(その中、小学生、小学生以下の子ども約30人)	ミニコンサート、マジックショー、子どもへのプレゼント配り、子どもへの無料ハヤシライス食事、大人へお茶会

の様子を観察・記録した。以下、イベントの様子を述べていく。

「ふれあい広場」のイベント5は夏祭りである。夏祭りは「ふれあい広場」の前の道路で行われた。夏祭りの企画・準備・実施は「ふれあい広場」の高齢者ボランティアスタッフ18名であった。高齢者ボランティアスタッフは事前に会場の舞台、座席、飾り、売り場コーナー、ゲーム用具などを準備した。地域住民約300人が参加した。地域の高齢者たち、親たち、子どもたちも参加していた。子どもたちは約100人であった。イベントの内容は、オープニング音楽、小学生のダンス、安来節、盆踊り、音楽演奏であった。高齢者たち、親たち、子どもたちはそれぞれの活動内容を楽しんで、嬉しそうな顔をしていた。それ以外に、食品売り場も設置していた。食品売り場では、おにぎり、揚げ物、かき氷、綿菓子、飲み物などを販売していた。販売員は「ふれあい広場」の高齢者ボランティアスタッフであった。売り場の雰囲気は和気あいあいとしていて、非常に賑やかだった。子どもたち向けのゲームが多く、お絵かきコーナー、スーパーボールすくい、風船つり、くじ引きコーナー、子ども花火大会、輪投げ、手芸販売等いろいろな活動も行ってた。輪投げに参加した子どもが多く、子どもたちは積極的に参加し、楽しそうだった。

「ふれあい広場」のイベント6はクリスマス会である。クリスマス会は「ふれあい広場」の中で行った。クリスマス会の企画・準備・実施は「ふれあい広場」の高齢者ボランティアスタッフ18名であった。高齢者ボランティアスタッフは、事前に会場の舞台、座席、飾りなどを準備した。地域住民約100人が参加していた。地域の高齢者たち、親たち、子どもたちも参加していた。子どもたちは約60人であった。イベントでは、まず、高齢者の演奏によるミニコンサート及びマジックショーがあった。ミニコンサートの内容はクリスマスに関する歌であった。マジックショーの内容は親たちも子どもも驚くマジックばかりだった。すごく賑やかな雰囲気、子どもたちはとても好奇心を持って、驚いたような顔をしていた。次に、高齢者ボランティアスタッフがサンタさんを演じて、子どもたちにプレゼント（チョコレート、飴などのお菓子）を配った。最後に、子どもたちにハヤシライスを出した。また、大人向けのお茶会もあった。子どもたちは「おいしい」「ありがとう」というような感謝の言葉を言った。

本論では、イベント活動そのものだけでなく、イベントを含め、イベントを開催する「ふれあい広場」での活動全体を「孫育てイベント活動」として、そこにおいて生じている「高齢者の生きがい感」を検討す

ることとした。

### (3) 研究方法

#### ①対象者

前述したように、「ふれあい広場」の運営者であるB氏をインタビューの対象とした。B氏は「ふれあい広場」を立ち上げた人物である。「ふれあい広場」の運営者として10年間運営に関わっている。中長期的な視野で、「ふれあい広場」を通して「高齢者の生きがい感」がどのように生じているか把握できる立場にあることから、B氏をインタビュー調査の対象とした。

#### ②インタビュー質問項目

本論で使用するインタビューの質問項目は、楊(2021)に従った。楊(2021)ではインタビュー項目は11項目であったが、「ふれあい広場」には実際に子どもが来て高齢者と一緒に活動しているので、本論では「ふれあい広場」に関する項目として1項目(「⑦ふれあい広場に来る子どもはあなたにとってどのような存在だと思いますか。自分の孫と違いがありますか。」)を追加し、12項目でインタビューを行った。

本調査のインタビューの質問項目は、以下の通りである。①②は運営者個人に関する質問、③④は参加した高齢者の様子に関する質問、⑤⑥⑦⑧⑨は運営者が講座での高齢者との関わりによって学んだことや気づいたこと、⑩⑪⑫は今後の講座への展望や意見であった。

- ①以前に教育に関する仕事をしたことがありますか。
- ②「ふれあい広場」を始めたきっかけは何ですか。担当者になったきっかけは何ですか。
- ③参加者はふれあい広場に参加することを通して、参加する前と参加する後でどのような変容がありましたか。
- ④参加した高齢者とのふれあいを見て、「これがいいな」「これが面白いな」と思ったエピソードがありますか。
- ⑤「ふれあい広場」でいろいろな活動を行うことを通して、新しく分かったことや気づいたことがありますか。
- ⑥「ふれあい広場」を担当して良かったと思うことは何ですか。一番印象に残ったことは何ですか。困ったことがありましたか。
- ⑦ふれあい広場に来る子どもはあなたにとってどのような存在だと思いますか。自分の孫と違いがありますか。
- ⑧孫世代を育てる活動を通して、生きがいを得られたと感じたことがありますか。
- ⑨あなた自身は孫世代を育てる活動を通して、自分の

思いや気持ち、家族のことなどを「ふれあい広場」の参加者に話したい・聞いてほしいと思いましたか。

⑩もっと「ふれあい広場」が充実するためには、どのような支援や改善が必要だと思いますか。

⑪「ふれあい広場」以外に、地域の子どもの豊かな成長のために、もし自分の力を貢献することができれば、何をやりたいですか。どこまでやろうと思いますか。

⑫何か言い残したことがあれば、ご自由にお話しください。

### ③手続き

B氏の承諾を得てインタビューをICレコーダーにより録音し、文字起こししたインタビュー内容を分析対象とした。インタビューを行ったのは2021年3月1日(土曜日)13:00~14:30、所要時間は、約90分であった。

### ④倫理的配慮

広島大学大学院人間社会科学部教育系プログラム倫理審査合同委員会に申請し、承認されている。

## 3. 結果と考察

表Ⅲ 全体カテゴリー分類表

内 容	数
講座そのものの価値	24
地域への貢献	12
親と異なる祖父母の価値	1
祖父母の知恵の伝承	1
子どもへの理解	1
その他	16

表Ⅳ 講座そのものの価値に関するカテゴリー分類表

内 容	数
家族や人の役に立っているという自覚	4
自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情	7
社会的な評価を受けること	3
子どもの成長が見られること	2

楊(2021)に従って、ICレコーダーに録音したインタビュー内容を、質問と回答に整理し、さらに回答を質問と整合がとれる内容に整理した。質問と関係のない内容は今回の分析対象から外した。質問と整合がとれる内容に整理した回答は55個のまとりに分類された。55個のまとりを、意味のまとりに分類

した。分類に当たっては、田渕ら(2012)、村山ら(2014)を参考にして設定したカテゴリーを提示し、大学院学生2名が提示されたカテゴリーに独立して分類し、その後、相談しながら一致させ、表Ⅲのように分類した。この分類から、「ふれあい広場」に関わる内容として「ふれあい広場」に分類された24個を対象とすることとした。「ふれあい広場」の活動内容に直接関係しない内容も含まれていたため、研究者1名、論者を含む大学院学生3名で協議して、まずそれらを除外し、分類する対象を「ふれあい広場」の活動内容に直接関係する内容に限定した。その結果、16個に限定された。限定された16個について、先に定義した「高齢者の生きがい感」の視点、つまり「家族や人の役に立っているという自覚や、自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情」の視点から上記の4名で分類した(表Ⅳ)。その中で子どもとの交流に関わるもの5個に限定して取り上げることにした。なお、インタビュー内容の記述にあたっては、紙幅の関係で質問と関係のある内容に厳選するとともに個人が特定されないように修正している。下線は論者による。

### (1) 「高齢者の生きがい感」の定義の視点から見た「高齢者の生きがい感」

#### ①家族や人の役に立っているという自覚

「子どもの方は、どう感じるかわからないけど、今、核家族、わかりますか？核家族が多くてじいちゃん、ばあちゃんは遠くにいる人が多いじゃないですか。だから、ここに来ると、じいちゃん、ばあちゃんはこんな感じ、という、それはわかると思います。生のじいちゃん、ばあちゃん。たまにちょこちょこっと会う人とは違って、立つときも、「よっこらしよ」という雰囲気とか手すりをもって動かんといけんという、高齢者の生の姿を見たり感じたりできるかなと思います。高齢者の姿、頭の中の高齢者像とか。ああ、高齢者ってこんなものだと学ばないですか。でも、現実に見たらそうではないんだなということが、いいも悪いも。高齢者はこんなものと思っても、元気な高齢者もいれば賢い高齢者もいれば、自分が思っていたよりもだめな、何もできない高齢者もいる。立ったり座ったりも大変な人もいる。チューブをつけている、そういう人も来ますから、こういう人、こういうのがあるんだね、というリアルな姿を見るチャンスにはなると思います。」(質問項目③の回答)

「毎日毎日見ているわけじゃないですから、いろんな子が適当に遊びに来てますから。ただ、あの子、あんなに大きくなったね、ということはありますが、具体的なその子の人間的な変化までを見ることはできないですけど、高齢者と関わることで、ちょっとした会話で関わることで、家庭とは異なる社会のルールが学べているような気がします。」（質問項目③の回答）

「ここは、以前はよくそういう子が来ていました。親の、ちょっと問題のある人もおられるから。親とけんかではなく、親が食事を与えないような人もいるわけ。そうしたら、土曜日とか、朝早くから、学校にいけないから、ここに来て兄弟で分け合ってラーメン食べるとか。そういう子もいました。ちょっと高額なお金をもってくる子もいたりしました。学校にちょっと相談かけたり。親がめんどうだとお金を渡して、それも大きいお金だからね。問題が起きたらいけんから。そういう注意をした子もいた。今は、学校に残っている子が多いから、だいぶ減りました。この地域は。」（質問項目③の回答）

下線で示したように、「ふれあい広場」において、高齢者が家族や人の役に立っている自覚を持ったことを示すものとして、主に以下の3点があげられる。

第1に、子どもの高齢者像の構築に寄与していることである。核家族化により祖父母と離れ、高齢者がどのような様子なのか分からない子どもがいる。「ふれあい広場」に来る子どもは、「高齢者の生の姿を見たり感じたりできる」。すなわち本で読んだり、人に聞いたりして自分で勝手に作っている「頭の中の高齢者像」ではなく、「元気な高齢者もいれば賢い高齢者もいれば」、「何もできない高齢者もいる」。「立ったり座ったりも大変な人もいる」というように、実際の高齢者の姿を見られることにより、高齢者の多様性を理解することにつながっていると考えられる。

第2に、子どもに家庭とは異なるしつけを教えることができることである。高齢者と子どもの会話で、「家庭とは異なる社会のルールが学べているような気がします」との発言が見られた。高齢者が子どもに、公共的な場所で家庭と異なる社会ルールを教えるといった機会は、次世代の子どもたちのよりよい成長のためになるだろう。このことは、自分自身の経験を伝達できるといった有用感につながっていると推測される。

第3に、困っている子どもに対して安心できる場となることである。「親の、ちょっと問題のある人もお

られるから。親とけんかではなく、親が食事を与えないような人もいるわけ。そうしたら、土曜日とか、朝早くから、学校にいけないから、ここに来て兄弟で分け合ってラーメン食べるとか。そういう子もいました。ちょっと高額なお金をもってくる子もいたりしました。「学校にちょっと相談かけたり」、「注意をした」という発言からわかるように、「ふれあい広場」が子どもにとって安心の場となる役割を持っていることがうかがえる。

## ②自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情

「スタッフだけでなく、お客さんの高齢者も。お客さん目線からいうと、どんな子どもが来ても、楽しいから、うれしそうにしています。子どもを見るということが、特に、年の差が孫よりもっと大きいかわからん。だから、楽しそうに、子どもさんを見る目はみんなあたたかいです。元気になる感じ。最終的には元気をもらう感じ。若い息が入るだけで…という。明るく、元気になるます。子どもの声が聞こえるというだけで。」（質問項目③の回答）

「ふれあい広場」において、高齢者が自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情を表したものとして、主に子どもとの交流に関わるものを取り上げる。

高齢者は「ふれあい広場」で様々なイベントを企画・運営し、参加した子どもから「おいしい」「ありがとう」といった感謝の言葉を受けるなどのフィードバックを得ている。高齢者はイベント活動による達成感とともに、子どもとのふれあいを通して、楽しくなり、明るく元気になっている。「ふれあい広場」に「どんな子どもが来ても」、高齢者は「楽しいから、うれしそうにしてい」る様子が見られる。高齢者は「子どもの声が聞こえること」や「若い息が入るだけで」、「明るく、元気になるます」と述べている。「最終的には元気をもらう感じ」という言葉からわかるように、イベント活動や日々の活動の中で、子どもがいる現場で子どもの様子を見ることで、高齢者は明るく元気になっており、このことから生きる意欲を高揚させることに繋がっていると思われる。

## (2)「ふれあい広場」に特徴的にみられる高齢者の姿

表Ⅳの分類にある、「子どもの成長が見られること」というのは、「ふれあい広場」に特徴的なことである。

「子どもたちの成長ぶりをみることができるとい

うこと。やはり、1年生よりもっと前、幼稚園くらいから来てる子がいるんですけど、この間久しぶりに来て、わからなくなって、立派な男の子になっていて、大人かと思ったんですけど。その当時、1年のころ、はだしでここらを渡ったりして、じっとしていない子らが、ものすごく落ち着いたいいお兄ちゃんになっていて、それが募金箱に募金させてくださいというようになってきたから。その成長ぶりと変化にすごく驚いたし、そういう、いろんな子どもの変化していく様子を見るということが、生きがいと言いますか、楽しみです。子どもの成長を見られることが生きがいです。それと、やっぱり子どもたちと会話をするという。それが楽しみであり、生きがい。」(質問項目⑧の回答)

「ふれあい広場」は10年続いているので、幼児のころからきていた子どもが中学生、高校生になって、イベントなどの際にふたたび訪れることがある。子どもが大きくなってふたたび訪れることによって得られる、孫を育てているかのような喜びがあげられる。「ふれあい広場」に来る子どもは「幼稚園くらいから来てる子が」おり、また「久しぶりに来て、わからなくなって、立派な男の子になっていて」というように、まるで自分の孫が成長したかのような喜びや驚きを感じている。遠くで暮らしていたり、成長したりしてほとんど会うことがなくなった自分の孫の姿を重ね合わせているように思える。これはB氏自身の感想であるが、他の高齢者にとっても同じだろうと思われる。自分の孫の成長を見るかのように「ふれあい広場」に来る子どもの成長を楽しみにすることが、祖父母世代としての喜びや充実感につながっていると推測される。

#### 4. 結論

本論の目的は、「ふれあい広場」を取り上げて、「高齢者の生きがい感」がどのように生じているのか検討し、「高齢者の生きがい感」という視点から見て必要な「孫育てイベント活動」の具体的内容について示唆を得ることであった。本論では、イベント活動そのものだけでなく、イベントを含め、イベントを開催する「ふれあい広場」での活動全体を「孫育てイベント活動」として、そこにおいて生じている「高齢者の生きがい感」を検討した。

今回、「孫育てイベント活動」でも、近藤ら(2003)が述べたように、家族や人の役に立っているという自覚が見られたが、それは具体的には子どもの高齢者像

の構築に寄与していること、子どもに家庭とは異なる社会ルールを教える場であること、子どもにとって安心する場となっていることであった。自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情を持つことも見られた。それは具体的には、高齢者が「ふれあい広場」で様々なイベントを企画・運営し、参加した子どもから「おいしい」「ありがとう」といった感謝の言葉を受けるなどのフィードバックを得ていること、また高齢者が、子どもとのふれあいを通して、達成感とともに、楽しさ、明るさを得て元気になっていることであった。

これら以外に、「ふれあい広場」に特徴的なこととして、子どもの成長が見られることがあげられた。「ふれあい広場」に来る子どもが大きくなってふたたび訪れることで、普段自分の孫に会えない高齢者が、自分の孫であるかのように、子どもの成長と変化を見ることができると、祖父母世代としての喜びを感じることができる。このことも高齢者の生きがい感につながるのではないかと示唆を得た。

以上から、「高齢者の生きがい感」という視点から見て必要な「孫育てイベント活動」の具体的内容として、子どもが普段の様々な姿の高齢者にふれあえるような内容、子どもに家庭とは異なる社会ルールを教えるきっかけが含まれている内容、子どもにとって安心する場となるような内容が必要だということが示唆された。また高齢者と孫ではない子どもとがふれあいイベント活動が、「高齢者の生きがい感」につながるためには、今回取り上げた「ふれあい広場」のように、イベント活動が単発的なものではなく、日々の活動に支えられていることが大切だということにも着目する必要がある。今回取り上げた「ふれあい広場」は、高齢者ボランティアスタッフに支えられた日々の活動が充実しており、各種のイベント活動も高齢者ボランティアスタッフが、企画・運営している。普段から顔なじみになっている子どもや保護者、地域の人々がいることが、イベント活動の充実につながっていると考えられる。また何年も同じ場所で続いているので、大きくなった子どもたちが何度も訪れることができることも、高齢者にとって意味があることである。年数回のイベント活動を行うことよりも、イベント活動を行うための、高齢者同士の日々の地道な活動の積み重ねに意味があることを指摘しておきたい。

今後は、今回取り上げなかった「孫育て交流活動」を取り上げて、そこで生じる「高齢者の生きがい感」はどのようなものか検討していくことにしたい。



## 注

1. 広島ホームページ (2021) 「第8期広島高齢者プランの策定について」<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/432248.pdf> (2021年11月9日取得)
2. K市ホームページ (2021) 「K市高齢者福祉計画第8期介護保険事業計画(地域包括ケア計画)(令和3～5年度」<https://www.city.kure.lg.jp/uploaded/attachment/58902.pdf> (2021年11月9日取得)
3. K市ホームページ (2009) 「K市まちづくり計画」<https://www.city.kure.lg.jp/uploaded/attachment/14946.pdf> (2021年11月9日取得)

## 引用文献

- 上村眞生・岡花祈一郎・若林紀乃・松井剛太・七木田敦 (2007) 「世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究」『幼年教育研究年報』第29巻, 65-71頁。
- 内田勇人・藤原佳典・西垣利男・香川雅春・江口善章・藤井明美・吉田隆三・作田はるみ・木宮高代・濱口郁枝・東根裕子・平尾浩子・山本存・矢野真理・松浦伸郎 (2013) 「高齢者による自然体験活動支援が児童養護施設入所児童の高齢者イメージに及ぼす影響」『日本世代間交流学会誌』第3巻第1号, 11-18頁。
- 大藤文夫 (2016) 「『ふれあい広場』の誕生—呉市三条地区の事例—」『広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報』第12巻第1号, 49-60頁。
- 亀井智子・糸井和佳・梶井文子・川上千春・長谷川真澄・杉本知子 (2010) 「都市部多世代交流型ダイプログラム参加者の12か月間の効果に関する縦断的検証: Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて」『老年看護学』第14巻第1号, 16-24頁。
- 北村安樹子 (2004) 「シニア・シルバー層の世代間交流の実態と意識」『ライフデザインレポート』第一生命経済研究所, 第163号, 24-31頁。
- 近藤勉・鎌田次郎 (2003) 「高齢者向け生きがい感スケール (K-I 式) の作成および生きがい感の定義」『社会福祉学』第43巻第2号, 93-101頁。
- 相良友哉・高橋知也・西中川まき・村山洋史・藤原佳典 (2021) 「首都圏高齢者のボランティア活動頻度と心身・社会的状況との関連—世代間交流型ボランティアを行う高齢者を対象として—」『日本

- 世代間交流学会誌』第1巻第1・2号, 25-32頁。
- 全国社会福祉協議会 (2010) 「生活支援サービス立ち上げマニュアル4 ふれあい・いきいきサロン」<http://scb43a48fd0a99fa2.jimcontent.com/download/version/0/module/6379312258/name/4> (2021年11月9日取得)
- 高橋知也・村山幸子・野中久美子・安永正史・藤原佳典 (2015) 「多世代が参加する子育てサロンの実態に関する一研究」『日本世代間交流学会誌』第5巻第1号, 57-64頁。
- 田淵恵・中川威・権藤恭之・大森昌之 (2012) 「高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『厚生指標』第59巻第3号, 1-7頁。
- 内閣府 (2004) 「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について」[https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/kodomoplan/p\\_02\\_41.html](https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/kodomoplan/p_02_41.html) (2020年11月26日取得)
- 内閣府 (2005) 平成17年版高齢社会白書第一章第三節」<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2005/zenbun/17index.html> (2021年3月10日取得)
- 内閣府 (2010) 「子ども・子育てビジョン～子どもの笑顔があふれる社会のために」<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/family/vision/pdf/honbun.pdf> (2020年1月9日取得)
- 内閣府 (2021) 「令和3年版高齢社会白書(全体版)第1章第1節高齢者の状況」[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2021/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2021/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf) (2021年11月27日取得)
- 村山陽・高橋知也・村山幸子・二宮知康・竹内瑠美・鈴木宏幸・野中久美子・深谷太郎・谷口優・西真理子・新開省二・藤原佳典 (2014) 「高齢者における『世代間のふれ合いにともなう感情尺度』作成の試み: 高齢者の心身の健康との関連」『厚生指標』第61巻第13号, 1-8頁。
- 村山陽・竹内瑠美・安永正史・山口淳・藤原佳典 (2021) 「小学校における高齢者の読み聞かせボランティア活動が児童の共感的関心の向上に及ぼす影響—親密な関係性の構築に着目して—」『世代間交流学会誌』第11巻第1号, 13-22頁。
- 森田久美子・青木利江子・小林美奈子・山本晴美・呂曉衛・永嶺仁美・佐々木明子 (2017) 「全国の学童保育における高齢者との世代間交流の実施状況と実施に関わる要因」『日本世代間交流学会誌』第6巻第1号, 27-36頁。
- 文部科学省 (2012) 「長寿社会における生涯学習の在

り方について第2章第2節世代別・性別の特性への配慮」[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112_1.pdf) (2021年10月31日取得)

楊丹 (2021) 『『高齢者の生きがい感』の視点から見た『孫育て応援講座』に関する一考察—H県S町の事例を通して—』『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」』第2号, 321-328頁。